

「あかし本のまちビジョン」トークイベント記録

■イベント概要

日時:2025年10月25日(土)14:00~

場所:イトヨーカドー明石店 1階催事場

■トークゲスト

- 上田 岳弘 氏(あかし本のまち大使、芥川賞作家)
- 譜久山 剛 氏(ふくやま病院理事長、ブックスポットオーナー)
- 益山 かおり 氏(親子紙芝居ユニット、Dチーム、地域活動)
- 吉成 信夫 氏(ぎふメディアコスモス元総合プロデューサー)

※トークイベント中は、明石市本のまちづくり推進アドバイザーである吉成信夫氏が進行

■トーク内容記録(発言者の敬称略)

【吉成】

それでは、これからトークショーを始めていきたいと思います。短い時間ですけれども、ゲストの皆様、よろしくお願ひします。

まずは上田さんから、自己紹介をお願いできますか。

【上田】

こんにちは。小説家の上田です。私は江井島出身で、高校はこの近くにある明石西高に通っていました。このイトヨーカドー明石店ができるかできないかくらいの時期に卒業したので、ここに来るのははじめてです。今日は楽しみにしています。

小説家として本を10冊くらい出していて、「ふたみん(二見図書館)」にも何冊か置いていくと思うんですけど。もし無ければ、二見図書館長に入れるよう言っていただけるとうれしいです。今日はよろしくお願ひします。

【譜久山】

こんにちは。譜久山といいます。西明石でやっていた譜久山病院を、数年前に西新町へ引っ越しました。この辺りの方には馴染みがないかもしれません、西二見から山陽電車に乗って西新町という駅で降りて、その北側にあります。

病院の待ち時間に好きな本に出会っていただけるよう、本棚を設置して、「まちライブラリー」という活動をやっています。よろしくお願ひします。

【益山】

みなさんこんにちは！小学生の娘と一緒に、明石を中心に紙芝居で活動している、きくちゃんこっちゃんといいます。

私は、明石に引っ越してきてから、娘の入学を機に「人とつながりたいな」「明石をもっと盛り上げたいな」と思って活動を始めました。PTA会長にも立候補して今年で3年目、学校を

盛り上げようと、日々奮闘しています。今日は緊張していますが、がんばります。

【吉成】

はい、ありがとうございます。みなさん、経歴も出自も全然違いますね。後ろにあるビジョンのイラストから抜き出してきたみたいな、そんなメンバーです。

(立ち上がり、バックパネルのイラストを見ながら)きくちゃんこっちゃんはこの辺ですかね(本棚をバックに弾き語りしているイラストを指差す)。譜久山さんは室内のブックスポット。上田さんは…(文章を書いているイラストを指差して)この人が若い頃の上田さんっていうイメージですね。明石では色々な人が本を介して色々なことをやっています。

【吉成】

それでは、今日は打ち合わせもしていないのでアドリブでいきますけれど。始めに上田さんに質問します。本との出会いについて、小・中・高あたりまで印象に残っている本はありますか?図書館なのか本屋なのか、本に関連してどんな風景が浮かんでくるかとか、どんなことが記憶にあるかとかでも構いません。

【上田】

自分は四人兄弟の末っ子で、当時はスマホなんかも無かったので、みんな本を買うんですね。それで家の中には漫画とか軍記ものとか、とにかく乱雑に色々な本が置かれてました。

【吉成】

家族で共通の本棚があったんですか?

【上田】

いえ、家のあちこちに乱雑に置いてあって、それを拾い読みしてました。最初はやっぱり漫画から入りましたね。

中高生になると、文庫本。ちょうど村上春樹や村上龍が出てきた頃で、当時は皆が読んでました。それを読みながら、こういう小難しい系の小説っておもしろいなと思って、そっちの世界に入っていました。

【吉成】

ちょうど今、上田さんの「ニムロッド」を読んでハマっています。村上春樹と作風が重なるというか、村上作品を読んでた世代が書いた作品という印象で、つながっている感じがします。

【上田】

二番煎じですけどね。

【吉成】

とんでもない。これからですから。

上田さんが中高生の頃、明石の書店はどのような感じでしたか?

【上田】

「ブックワン」という本屋によく行っていました。当時ポケベルを持ってなかったんですけど、だいたい本屋にいることを友人も分かっていたので、よく本屋まで探しに来てくれました。

【吉成】

譜久山さんはどうですか。子どもの頃の本との思い出は、何かありますか。

【譜久山】

本は、親が図書館からよく借りてきてくれていました。はじめは絵本だったと思います。一度に借りられる冊数が当時一人 10 冊くらいで、家族全員分とはいわないけど、20~30 冊くらい借りてきてくれて。それを読みふけっていました。

【吉成】

かなりの本好きだったんですね。

【譜久山】

そうですね。本好きになった理由は分かりませんが。運動神経が鈍いので、スポーツに割く時間を使って本を読んでいました。

【吉成】

じゃあ、学校の図書室なんかもよく行かれていたんですか。

【譜久山】

はい、中・高の時は図書室に入り浸っていました。

【吉成】

なるほど、ありがとうございます。では同じ質問で、益山さんお願ひします。

【益山】

私は小さいころあまり絵本になじみがなくて。絵を描くのが好きなので、自分で絵を描いて、物語を作って楽しんでいました。でも学校の図書室はすごく好きで、特に戦争モノの「はだしのゲン」とかを読んで、すごく感動していたのをよく覚えています。絵本にハマったのは娘が生まれてくれたおかげで、今はどっぷり絵本の世界に浸かっています。

【吉成】

自分で色々描いていたっていうのは、小学校の頃ですか？

【益山】

そうですね、幼稚園くらいの頃は、一人でずっと絵を描いていた記憶があります。

【吉成】

いますよね、そういう子。幼稚園とか小学校くらいで。もちろん人と遊ぶ時もあるけど、一人で自分の空想の世界を楽しんでる、みたいな。

【益山】

そうです。そういうタイプでした。

【吉成】

ありがとうございます。自分で書くといえば、上田さんは小さい頃から「書き手になりたい」とずっと思っていたという話を、どこかで読んだ気がするんですけど。

【上田】

そうですね。書こうという思いはあって、ワープロがなかったので原稿用紙を買って。

【吉成】

それはいつ頃のことですか？

【上田】

中三くらいです。全然書き進められませんでした。

【吉成】

その頃から作家になりたいという意識があったんですか？

【上田】

「書きたい」という気持ちは5~6歳からありました。でも当時は書けなかったです。

【吉成】

5~6歳ですもんね。でも、すごくないですか。そんな小さい頃からそういう意識があって、本当に芥川賞作家になってるんだから。びっくりしました。

【上田】

ありがとうございます。

【吉成】

上田さんは高校まで明石ですか？小さい頃はやっぱり海に？

【上田】

浜が近かったので。高校生くらいまで、夏休みの暇な時は海で泳いでいました。

【吉成】

すごい。明石の人はみんなそうなんですか。(客席を見る)あ、何人か頷いてますね。

【上田】

地元の江井島がすごく浜が近いところだったので。浪人時代も泳いでました。

【吉成】

江井島には、確かに遊泳場がありましたね。

ところで、浪人されてたんですか。浪人中も明石に？

【上田】

はい。

【吉成】

そういうえば浪人時代に、バイトをされてたと伺ったんですけど。

【上田】

はい。浪人した年の4~6月に本屋でバイトしてました。今考えると、なんでそんなバイトやったのか分からないですけど。今ではいい思い出です。

【吉成】

「勉強しなきゃ」みたいな焦りは無かったんですか？

【上田】

「卒業したし、バイトくらいしてみよう」くらいの気持ちでした。今になって思い返すと、勉強しろよって思いますけど。

【吉成】

その時に本も読んでたんですか？

【上田】

本屋でしたから、たくさん読みました。

【吉成】

やっぱりその頃から本に近いところにいらしたんですね。ありがとうございます。

それから、譜久山さんと益山さんはそれぞれ場を持っている方、活動されている方ですねまず譜久山さんに。まちライブラリー、明石では「ブックスポット」ですね。どうして病院に置こうと思われたんですか？

【譜久山】

病院に救急で来られる患者さんも多いんですけど、その人の生活の中に病気や不調の元があるはずなんですね。食べ物であったり生活習慣であったり。そこを変えないといけない。個人の生活や社会全体がもっと良くなるような、歯車をちょっと変えるようなことができないかなと思って。まちライブラリーという活動を通じて、「健康のためにこうすることやつたらいいよ」とお伝えし始めたことが、元になっています。

【吉成】

明石はブックスポットがすごく多いところで、全部合わせると80か所以上になるそうです。皆さん、なかなか知らないですよね。自分の近所にあるブックスポットは知ってるかもしれないんですけど。合わせるとすごい数になる。まちライブラリーが何かというと、民間に市民の皆さんのが本棚を作り、そこに自分たちが読んで欲しい本を入れて、収益と関係なくボランティアで運営している場所なんですね。

ふくやま病院は僕も伺ったことがありますけれど、1階ロビーの待合で読んでいる人だけでなく、すごいなと思ったのは、2階3階とフロアごとに本棚がありましたよね。

【譜久山】

急性期の病棟と、緩和ケアの病棟ですね。場合によってはそこで手に取る本が、その人にとって最後の1冊になるかもしれない。その辺りも考慮しながら、急性期・緩和ケア・外来の3つの本棚を持っています。

【吉成】

病院暮らしが長いと、個室以外では社交的なくつろぐ場が無いわけですよね。その点、ふくやま病院の病棟の本棚は、書斎みたいな感じな印象を受けました。

【譜久山】

タコつぼのような部屋のことですね。ある程度、人目を気にしなくていい場所になればと思って設置しています。

【吉成】

やっぱりタコのまちだからですか。そういう部屋があるのは大事ですね。

他市では、病院に来るのを待つだけでなく、先生がまちに出て行くという活動もありますね。

白衣も着ずに。社会的処方という活動だそうですが。

【譜久山】

そこまではまだまだ。これから色々と取り組んでいきたいですね。

【吉成】

1階は誰でも利用できるんですか？

【譜久山】

はい。ですが病院ですから、なかなか。たまに近所の子どもが1階ロビーで宿題することもありますけど。

【吉成】

ありがとうございます。

続いて益山さんは、なぜ親子で絵本の活動をされているのですか？

【益山】

娘の小学校入学を機に、学校の読み聞かせボランティアに参加しました。クラスの朝の会に教室で読み聞かせするんですけど。朝、特に月曜日って憂鬱になるじゃないですか。だけど、先生でもない大人が楽しそうにやってるのを見た子どもたちが「元気になる」って言ってくれて。それを学校だけじゃなく、まち全体に広げたいと思って図書館でも始めたんです。

娘がそれを見て、「私もやりたい」「みんなを元気にしたい」と言って、一緒に始めたんです。

【吉成】

それは、娘さんが何歳の時ですか。

【益山】

8歳の時です。

【吉成】

それはすごい。ぜひ娘さんからもお話を聞きたいです。

(客席に座っている娘さんに)その時どうだった？

【益山(娘)】

お母さんの姿を見て、かっこいい、私もみんなを笑顔にできたらいいなと思いました。

【吉成】

「かっこいい」っていいね。娘さんは家で色々なお母さんの顔を見てるわけじゃないですか。もちろん、こわいところとかも。でもかっこいいと思ったんだ。ありがとうございました。

【吉成】

これはみなさんに聞きたいんですけど。明石は、これまで「本とつながる」取り組みをやつてきたまちですね。まちには色々な人がいて、本が好きな人だけでなく、例えばスポーツ好きな人もいる。そういう人でも、何か悩みがあれば本を読んでみようということもあると思います。特に大人は。みなさん、ビジョンについて何か感想はありますか。こういう風にやつたらおもしろい、みたいな話でもかまいません。

【上田】

魚住の親水公園の近くにある西部図書館で、浪人時代なんんですけど、コーヒーを飲みながら文庫本を読んでいたんですね。その空間とか、時間のことすごくよく覚えていて。一人になれる、“自分”になれる時間というか、読んでた自分というのをよく思い出すんです。そういう本を読む場所、本を読むロケーションが増えるといいなと思います。

【吉成】

やっぱりコーヒーがあるといいですね。

【上田】

自販機でもいいと思います。何かあれば。

【譜久山】

病院ロビーは、自由に来てもらっていいと言いつつ、とっつきにくいようで。病院はバリアフリーなのに敷居が高いと言われます。そこで月に1回、1冊の本をテーマにつながる場をもっています。例えば「糖尿病について」とかテーマを決めて、医療関係者である自分たちがテーマに沿ってまちなかで発信して、そこでつながれる場をつくりたいなと思っています。

【吉成】

ある意味、読書会的な場ですね。そこに男性はどれくらい来ますか？

【譜久山】

だいたい半分くらいが男性だと思います。

【吉成】

そういう場に中高年の男性は来にくいことが多いですね。何か工夫されてるんですか？

【譜久山】

男女比は自然にそうなりますね。ただ、最近メンバーが固定化していて。もう少し流動的になる工夫をしたいと思っています。

【吉成】

ありがとうございます。益山さんはどうですか。

【益山】

私はちょうど子育て真っ只中で、明石に来て間もないということもあって…。私にできることは、と考えると、子育世代を入り口にして、ですね。「本を読みましょう」では敷居が高いので、やりたいこととしては、図書館とコラボして秋のピクニック、明石公園で、とか。あとはウクレレとかの音楽とコラボして、音楽好きの人も来られる読書会のようなことを考えてます。これは市への希望なんんですけど、明石公園やあかし市民広場に本を置いて、図書館に行かなくても気軽に本を読める場所が増えると、本への親しみが増えるのかなと思います。

【吉成】

図書館は「館」ですから。近づきにくい人もいますよね。日差しや風のある、屋外の気持ちいい場所で本が読めると、また違いますよね。そういうロケーションを覚えてる人が、将来上田さんみたいに作家になるかもしれませんね。

それに、いきなり本にいかなくても、益山さんがやられているように朗読とか劇とか。本って言葉で書かれてるから、言葉にこだわるというのもありますね。言葉でキャッチボールすれば。

【益山】

そうですね。普段の活動では読み聞かせだけでなく、紙芝居や手遊びも取り入れることで、「掛け合い」ができます。

【吉成】

掛け合い、いいですね。

【益山】

はい。保育園の先生から言われたのは、「気が滅入った時も、給食に入ったシュウマイを見たら、きくちゃんこっちゃんが歌ってたシュウマイの歌を思い出した子ども達のテンションが上がり、みんな笑顔になれる」って。なので、本や紙芝居がツールになって、つながったり笑顔になったりしていけばいいな、という思いがあります。

【吉成】

そろそろ時間が近づいてきましたね。今までのお話を聞かれて、丸谷市長いかがですか。感想なども含めて、何かいただけますか。

【丸谷市長】

みなさんのお話を聞いていると、ビジョンに示した通り、「本とつながる」だけでなく「本からつながる」、いろんな人とつながっていくということが起こっているんだなと感じます。人とのつながりももちろん、本って、それ自体から学ぶこともすごく多いんです。私自身も環境教育をやりながら、「本」と「体験」をつなげることの重要性を感じました。図鑑で見た生き物一例えばキツツキとかーが実際に目の前に現れた時の、感動の度合いってすごいんです。だから本や物語の世界と現実をつなぐことが、すごく大事だと思っています。

譜久山先生には、私の母もお世話になっています。母がふくやま病院を選んだのは、本があるからなんですね。本が大好きで、本を読みながら最期を迎えたい、と言って。今日のお話を聞きながら、そのことを思い出しておりました。

上田さんとは地元が同じなので、「あの場所のことだな」と懐かしくお話を聞いていました。私も子どもが小さい時、夏は毎日江井島の海岸に泳ぎに行っていましたよ。自分もよく知っているこうした風景も含めて創作活動につながっているんだな、と嬉しくなりました。

きくちゃん(益山さん)が言ってくださいましたように、これからは、図書館に行かなくても本に触れる場所を増やしていくと思っています。整備中の「西明石地域交流センターicotto」では、3階の図書スペース以外のフロアにも本を散りばめようと構想しています。その方向性が間違っていなかったんだな、と自信を持つことができました。

ゲストのみなさん、今日参加してくださったみなさんも含めた、一つ一つのつながりが、これからこの本のまちにつながっています。これからもぜひ一緒に、本のまち明石を育てていっていただければと思います。よろしくお願ひいたします。

【吉成】

丸谷市長、ありがとうございます。それでは短い時間でしたが、終わりにしようと思います。皆さんがおっしゃっていたのは、本からコミュニケーションするということですね。そこには間に人がいて、相手がいて、魅力的な人がいて。そういう人たちををつないでいくことで、豊かで素晴らしいまちになっていくと思います。

また私としては、ぜひ上田さんのような人が明石から生まれてほしいと思います。子どもの頃から絵が好きな人も、文章が好きな人がいます。小説家の育成というと大げさですが、そうした人たちの流れのようなものができるといいなと。上田さん、そういう人に向けたメッセージなどいただけますか。

【上田】

色々な本がありますが、自分に合うものを見つけてほしいですね。役に立つかどうかよりも、「これを読んでる自分が好き」と思えるもの。内容でも、シチュエーションでも。そうした本を、例えばふくやま病院のロビーみたいな場所で見つけられるかもしれません。一つ一つの出会いを大事にしてほしいですね。

【吉成】

皆さん、ありがとうございました。それでは、司会にマイクをお返しします。